

(様式6)

平成27年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における  
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」  
委託業務報告書【推進地域】

番号	16	都道府県市名	富山県
----	----	--------	-----

### 1 推進地域における学力に関する現状

本県の高校進学率は、全国的にも高く、ほとんどの生徒が高校に入学する状況にある。こうした中、能力・適性、興味・関心、進路等の面において多様な生徒が入学するようになっている。平成19年12月に策定された、「県立学校教育振興計画基本計画」では、学習意欲や読解力の低下傾向への懸念、思考力や表現力についての課題が指摘されるとともに、「基礎基本となる知識や技能」「自ら課題を見つけて、自ら学び考える力」がこれからの高校生に求められるものとして挙げられているところである。

### 2 平成27年度の重点課題

本県では、「平成27年度富山県教育委員会重点施策」の中で、「確かな学力の育成」を掲げ、基礎的・基本的な知識・技能を身につけ、自ら学び、考え、問題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、コミュニケーション能力を育むことを課題としている。特に県立高校では、「魅力ある教育活動支援事業（旧とやまの県立学校人づくり推進事業）」において、各県立高校が策定した中長期ビジョンの実現に向けた実効性のある取組を支援し、教育の改善と充実を図るとして、学び直しや発展的な学習など個に応じた確かな学力の育成などの学力向上への取組に支援を行った。また、「教師の学び支援塾事業」において、教育実践に優れた授業力向上アドバイザーや退職教員等を活用し、熟達教員の持つ優れた教科指導等、指導上のノウハウを若手教員に伝承したり、各学校で公開される授業を他校教員が参観するなど研修を支援する、などの確かな学力の育成に向けた施策を行った。新規の「高等学校授業力向上支援事業」において、教員向けの指導力向上講座や教科指導法の意見交換、県外セミナーや先進校への教員派遣を通して、教員の教科指導力を高め、資質の向上を図った。

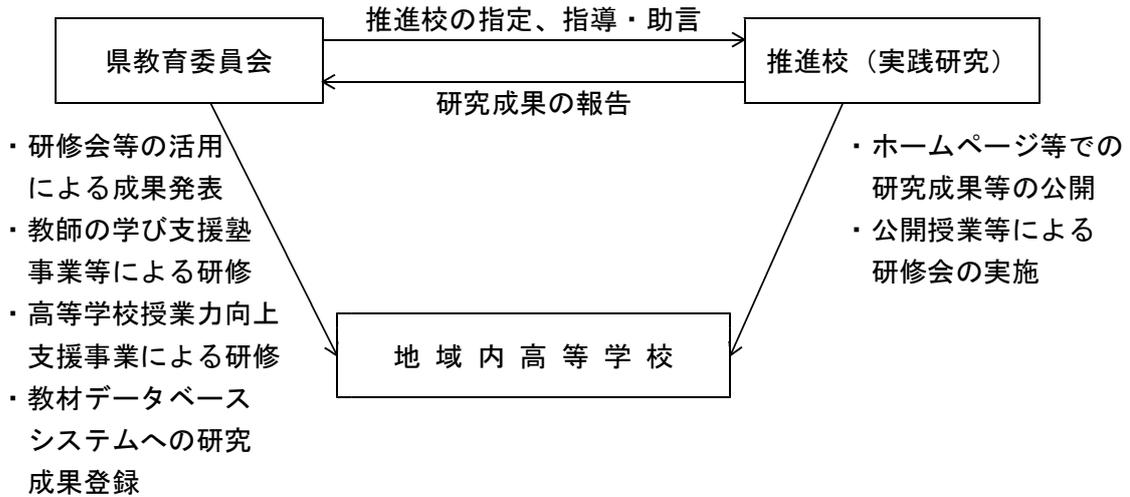
### 3 研究の内容

#### (1) 推進校の指定

学力定着に課題を抱え、平成25年度から本事業の指定を受けていた小杉高校では、平成25年度は第1学年を中心に、平成26年度は第1、2学年を中心に、様々な授業形態を使った言語活動の充実に向けた授業改善等に取り組み、生徒の学習意欲の向上などに大きな成果が見られたが、学校全体を含んだ各教科・科目における学習到達目標や評価規準の設定を行うことで、学習評価と指導の一体化についても研究を進める必要があった。平成27年度は、第3学年まで含んだ継続的な研究を続けていき、その成果を各段階ごとに確認する必要があると考えた。

以上より、県教育委員会としては、小杉高校を平成27年度も推進校として指定し、効果的な学習指導体制の研究をさらに発展、深化させ、その研究の過程や成果について広く他の高校に普及できるようにしたいと考えた。

- (2) 学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究実施要領の策定  
 研究を進めるにあたって、実施要領を定め、県教育委員会、推進校それぞれの事業における役割を明確化した。



(3) 支援策

- ① 学力向上推進協議会における指導、助言  
 大学教授などの学識経験者や保護者の方、教育委員会により組織し、年間2回、総合学科に最も期待される各教科の協力的・協同的・統合的な学びを生かした取組がなされるよう、本事業への指導・助言をいただいた。
- ② 魅力ある教育活動支援事業（旧とやまの県立学校人づくり推進事業）の活用  
 「日常的な教育活動の充実」や「教育形態・方法等の改善充実」等の取組を支援した。
- ③ 教師の学び支援塾事業の活用  
 推進校で実施される学力向上に関する公開授業などの研修会を、県下の小、中、高校に周知し、参加を呼びかけるとともに、担当指導主事等を派遣して授業に対する指導助言を行うことで、本調査研究が効果のあるものとした。
- ④ 高等学校授業力向上支援事業の活用  
 教員向けの指導力向上講座や教科指導法の意見交換、県外セミナーや先進校への教員派遣を通して、教員の教科指導力を高め、資質の向上を図った。
- ⑤ 高大連携未来を拓く人材育成事業の活用（小杉高校で平成24年度より継続実施）  
 県内大学と県立学校が連携し、大学教員による授業展開及び大学での学習につながる学力を育てるための効果的な教育プログラムの共同研究の実施を支援した。

(4) スケジュール

- 4月 実施要領の策定、推進計画立案
- 5月 事業実施（～2月）
- 6月 第1回公開授業研究会（小杉高校）
- 11月 第1回学力向上推進協議会（中間評価）・第2回公開授業研究会（小杉高校）
- 12月 文部科学省視察
- 1月 第2回学力向上推進協議会（事業評価）・第3回公開授業研究会（小杉高校）
- 3月 報告書作成、ホームページに公開

4 研究成果等の把握と検証

(1) 実態調査の実施

県総合計画の県民参考指標（「授業がわかる」と答える生徒の割合）に係る調査を継続して実施し、県全体の傾向を把握する。

(2) アンケートの実施

県教委としては、推進校の教員を対象に実施。数値化しやすいものと、数値化しにくいもの（数値化になじまないもの）についても、アンケート調査を実施するなど、客観的な評価を行うことができるように努め、成果や課題等について継続的な把握を意図した。

(3) 学識経験者などによる外部評価

学力向上推進協議会の委員により、事業の内容を客観的に評価した。

5 推進地域における研究成果等の活用

<研究成果>

(1) 実態調査結果

12月実施 全県立全日制高校 第2学年対象（抽出調査）

「ほとんどの教科がわかる」「わかる教科が多い」を合わせた割合は、昨年度の調査と比較して、5.2ポイントの増加となった。昨年度は新学習指導要領の完全実施による学習内容の増加と授業進度の速さを原因とし、4.9ポイント減少したが、本年度は各学校での対応がすすんだためであると考えられる。

(2) 推進校教員（23名）へのアンケートの結果

- ① 生徒の学力向上の取組みとしては、「学び合い（教え合い）」を実施した教員の67%が効果があったと回答した。その具体的な内容として、「学び合いを取り入れることで、複数の解法を習得することができ、学びが深まった。」「これまで理解ができていなかった生徒は周りに質問しやすく、教える生徒にとっても理解が深まった。」「授業中に教え合いをする時間を作ったことで、授業外において生徒同士の勉強の話が増え、教えた側の理解が更に深まった。」などの意見があった。
- ② 生徒の学習意欲を喚起する取組みとしては、「ペア・グループ学習」を実施した教員では65%、「学び合い（教え合い）」を実施した教員では70%が効果的だと回答した。「ペア・グループ学習」の効果としては、「生徒同士意見交換をする中で、いろいろなものの見方や考え方があることに気付き、自分で調べてみようという気になった。」「クラスメイトとの共同作業なので、グループ学習が教え合いに発展しながら、協力して取り組めるようになった。周囲に目を向けるようになり、交流しながら仲も深まった。」「少人数で意見を出しやすく楽しい雰囲気になり、コミュニケーションが活発になる。生徒同士に役割や責任を感じ協力し合う。」などの意見があった。また、「学び合い（教え合い）」の効果としては、「授業の中で、分からないことを友人に尋ねたり、教えたりする雰囲気が生まれたこと。」「生徒同士で話をしながら学習できるので楽しみながら取り組めるようになった。」「設問によりいろいろな解き方を互いに教え合い、問題を解決していくのに大変効果が上がる。」などの意見があった。
- ③ 生徒の学力向上に必要な授業改善としては、「どのような場面で協同学習を取り入れれば効果的なのかあるいは他の方法がよりアクティブで効果的なのか、その選択にはしっかりした目標を立てる必要がある。」「生徒の学習意欲を喚起する教材や発問の工夫が必要であり、グループ学習を、思考を深めあう機会として設定する授業計画が欠かせないと感じた。」「1時間の授業に何を学んだかを生徒に明示し、授業の終わりには理解できたか確認することが大事だと感じた。」や「生徒に考えさせる内容、時間を十分にとる。考えを言葉にし発表したり書いたり伝える活動を繰り返し行う。」等の意見があった。

- ④ 今回の実践を踏まえ、今後取組んでいきたいこととしては、「言語技術トレーニング。特に①考えたことを発言する。②自分の考えを文字化して記述する。この2つの力を高めていきたい。」や「さらなる教材研究と教科内での意思疎通を十分にすること。」「コミュニケーション力や表現力を高め、考えさせる工夫をしていきたい。」等の意見があった。

(3) 学力向上推進協議会委員による評価等

(学識経験者の委員より)

- ・全ての先生方が、よりよい授業をめざして挑戦的な授業を行っている。
- ・子供を大事にできる先生が増えた。
- ・みんなで一緒に勉強することが、楽しいことに気づかせ、全部の子供たちを授業の世界にいざなっている。

(PTAの委員より)

- ・授業に対して、指導案を作り学識経験者の方に教科全体で指導していただいたのちに授業をしていく中で、先生方のミーティングの機会も増えたということであった。指定が終了しても、できる範囲で継続してほしい。
- ・小中高がこれだけ連携していることが今回初めて分かった。もっと地元でPRすべきである。

<成果の活用>

全ての県立学校が、今後も中長期の視点に立って、実効性のある教育改革の取組みを着実に実行していく必要がある。事業としては平成27年度で終了するが、この事業から得た、学び直し、基礎基本の確実な習得、個に応じた確かな学力の育成などの先進的な取組を、県全体に普及できるように支援をしていきたい。

成果の普及については、

- ① 各種研修会の場を活用した、研究の成果等を発表
- ② 優れた教材や指導法を県の教育ネットにある教材データベースシステム（名称：コーリャックス）に登録して公開
- ③ 県立学校課等のホームページでの研究成果の公表  
など、昨年度に引き続き、取組の成果の普及に努めたい。

平成27年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における  
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」  
委託業務報告書【推進校（学校）】

番号	16	都道府県市名	富山県
----	----	--------	-----

## 1 学校の概要

<生徒数・学級数(平成27年4月現在)>

学校名	富山県立小杉高等学校（とやまけんりつ こすぎ こうとうがっこう）				
学年	1年	2年	3年	計	教員数
学級数	4学級	4学級	4学級	12学級	42人
生徒数	160人	158人	157人	475人	
学校のホームページアドレス	http://www.kosugi-h.tym.ed.jp/				

○設置学科 総合学科

○設置系列 探究系列（文系総合・英語重視分野、理系総合・理数重視分野）

美術・スポーツ系列（美術分野、体育武道分野）

生活・ビジネス系列（家庭食物分野、保育福祉分野、商業情報分野）

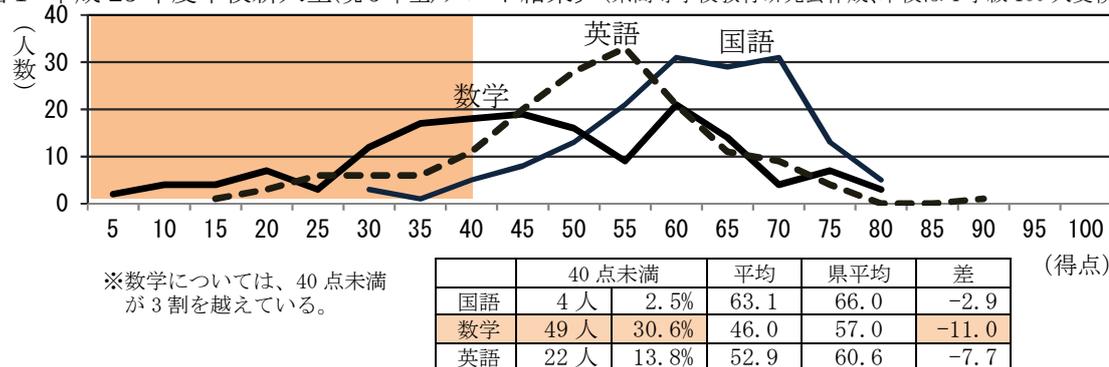
## 2 推進校における学力に関する現状

### （1）総合学科開設20年を迎える本校における学力概況

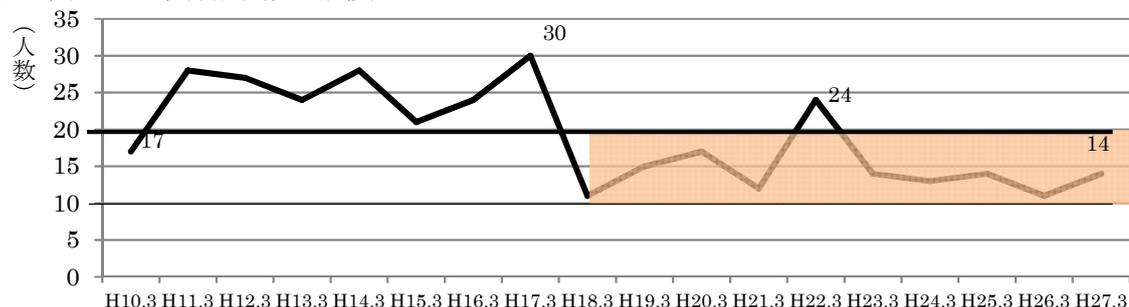
本校は平成7年度に、普通科・農業科併設校から本県初の総合学科単独校となり、平成26年度に開設20年目を迎えた。最近では、開設当初に比べ入学してくる生徒の学力や学習意欲、目的意識等に変化が見られ、中学校までの学力が十分身につけていない生徒も多く入学している（図1）。

また入学後は、進路意識を高め、職業観を培うよう職場体験や大学訪問の充実など、キャリア教育の推進に努めてきたが、3年生になってもなかなか進路目標を定めることができず、学習に集中して取り組めない生徒がいる。卒業後の進学状況においても、国公立大学の合格者数は平成17年3月卒の30人を最高に大きく減少しており（図2）、国公立大学進学希望者への指導にも課題が見られる。

〔図1 平成25年度本校新入生(現3年生)テスト結果〕（県高等学校教育研究会作成、本校は4学級160人受検）



〔図2 国公立大学合格者数の推移〕



## (2) 平成26年度文部科学省「学力の定着」に関する実践研究の成果

このような状況にあって、一人ひとりの進路実現を図るための学力向上を重点課題とし、平成25年度、26年度と文部科学省の本調査研究の委託を受け、「学ぶ意欲を高め、主体的な学びを引き出し、学力の定着を図る」授業実践に取り組んだ。平成26年度のおもな成果を次のように捉えている。

[平成26年度実践研究成果の要点]

### ア 学ぶ意欲を高め主体的な学びを引き出す「授業研究」の推進

- 生徒との親和関係の構築
  - ・生徒と教員の親和関係があり、「間違っても恥はかかない」という姿勢が見られるようになった。
- 中学校教員との連携による授業研究の推進
  - ・中学校教員との連携による授業研究を通して、生徒の思考に即した適切な授業展開の工夫や生徒の努力を励ます形成的な評価、言葉かけが主体的な学習の質を高めることを確かめることができた。

### イ 各教科・領域の円滑な連携による多様な言語活動の充実

- 高校3年間を見据えた課題研究の実践に着手
  - ・昨年度は、1年次の「産業社会と人間」、2、3年次の「総合的な学習の時間」の内容を見直し、これらの時間を活用して高校3年間を見とおした課題研究の実践充実に取り組むこととした。
  - ・「生徒自身が問いを持ち、解決し、さらに問いを持つ」という高校ならではの学習を目指し、各学年において課題研究における指導改善に一步踏み込むことができた。

### ウ 様々な連携協力による教育活動の充実及び調査研究の推進

- 教員及び生徒の変化
  - ・この2年間、継続して学校をあげて全教科で授業改善に取り組んできたことにより、生徒が穏やかになり、高校ならではの授業がなされるようになってきた。
  - ・指導力向上に向け、日常的に授業改善に取り組む姿勢が見られるようになってきた。
- 小中学校等との連携による授業改善の深化

## (3) さらなる課題解決に向けた継続的な実践研究の推進

2年間の取り組みにより、生徒や教員の意識、学力等に着実な改善が見られた。平成27年度においては新しい学習指導要領が全面実施され、本校での実践研究を開始した平成25年度入学生が第3学年を迎えたことから、3学年も対象とし、進路実現を図る学力の定着に向け実践の充実に努めたい。

## 3 研究課題

**基礎学力の確実な定着を図り、生徒の多様な進路実現を着実に支援する指導の充実**

## 4 平成27年度の重点課題

### (1) 学ぶ意欲を高め主体的な学びを引き出す「授業研究」の推進

生徒の学ぶ意欲を高め主体的な学びを引き出すことが、知識・技能の定着を図る重要な要因と考えられる。学ぶ意欲を高める指導内容や指導方法・形態の工夫から、学びを励ます形成的な評価の活用など多方面から授業改善に取り組み、学習の好循環を導くよう指導の充実に図る。

### (2) 各教科・領域の円滑な連携による多様な言語活動の充実

生徒の思考力・判断力・表現力等の問題解決能力の育成には、教科・領域の枠を越えて言

語活動の充実を図ることが必要と考えられる。国語科において国語を適切に表現し的確に理解する能力の基盤を培うとともに、各教科や産業社会と人間、総合的な学習の時間等においても、論理的に物事を考え、自分の考えを正しく相手に伝えるなどの多様な言語活動を繰り返し体験することで、実践的なコミュニケーション能力や課題解決力の育成を図る。

**(3) 様々な連携協力による教育活動の充実及び調査研究の推進**

地元小中学校と連携し、小中学校での実践に学ぶとともに、生徒の発達段階に応じた連続的な指導に努める。また保護者や地域の協力を得て、一体的な指導や多様な活動の充実を図る。

**5 研究の具体的内容**

**(1) これまでのおもな取り組み (27年度)**

**ア 公開授業研究 (26年度より継続)**

- (ア) 公開授業研究会の開催  
学期に1回の公開授業研究会を開催し、広く意見をいただき授業を改善
- (イ) 推進地域学力向上推進協議会での授業公開  
推進協議会の開催に際し、公開授業を行い委員から指導助言をいただき授業を改善
- (ウ) 全教員による授業公開Weekの実施  
各学期に1回の授業公開週間を設け、全教員が互見授業を行い各自が授業を改善



**教科別協議会**

**イ 指導力向上研修 (26年度より継続)**

- (ア) 松本謙一教授による授業力向上研修会の実施  
富山大学の松本謙一教授を指導助言者に、3回の公開授業研究会に向けた事前研修を毎回実施。授業者が模擬授業を行い指導案を検討、教科の枠を越えて改善
- (イ) 清水義彦教授による意識啓発講座の実施  
富山高等専門学校の清水義彦教授の授業支援により、生徒のマインドセットやSNSを活用したタイの大学生との交流(実践的な英語教育)を推進
- (ウ) 全教員参加の学校課題別研修会の実施  
生徒指導や特別支援教育など、高校が直面する「今日的な教育課題」について共通理解



**公開授業風景**

**ウ その他の研修等**

- (ア) PTA合同研修会  
アクティブ・ラーニングの授業を保護者が体験
- (イ) 小中高合同研修会  
小杉地区の小学校、中学校、高等学校の教員が集まり、互いの教育現状の理解と交流



**PTA合同研修会・小中高合同研修会・生徒理解研修会**

(2) 公開授業研究会等公開授業一覧

ア 第1回公開授業研究会 期日：平成27年6月22日(月)

指導講話 富山大学人間発達科学部教授 松本 謙一

教科	科目	学年	単元名	指導者	人数
国語	国語総合A	1年	<小説>「旅する絵本」	黒田 圭	27
	実践国語	3年	立場と根拠を意識して小論文を書く	土肥 香子	22
公民	現代社会	1年	日本国憲法の基本原理	廣田 雄希	40
	公民探究	3年	哲学と人間	立田 幸浩	38
数学	数学Ⅰ	1年	1次不等式	出口 由梨	22
	数学Ⅱ	2年	三角関数のグラフ	斉藤 匠平	27
	数学理解Ⅱ	3年	2次関数のグラフとX軸の共有点	道下 愛	30
理科	物理基礎	2年	落体の運動	野村和佳子	23
保健体育	体育	1年	長距離走	川原 祐策	23
美術	造形表現	3年	テーマを決めて写真を撮る	河合 雅子	9
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	1年	Lesson 4 Tezuka Osamu : A Message for You	宮原 京子	30
	コミュニケーション英語Ⅱ	2年	Lesson4 Space Elevator	牧田扶佐子	30
家庭	家庭基礎	1年	食生活を考える	楠 顕子	40
情報	社会と情報	1年	情報をわかりやすく伝える	松井 聡	40
英語	実用英語Ⅰ	2年	TOEFL Integrated Task	林 美香	26

イ 第2回公開授業研究会 期日：平成27年11月9日(月)

指導講話 富山大学人間発達科学部教授 松本 謙一

研究講話 国立教育政策研究所総括研究官 山森 光陽

教科	科目	学年	単元名	指導者	人数
国語	国語総合A	1年	<小説>太宰治「富岳百景」	黒田 圭	28
	実践国語	3年	課題文型小論文を書く	土肥 香子	22
公民	現代社会	1年	経済のしくみ	廣田 雄希	40
	公民探究	3年	社会保障の役割	立田 幸浩	38
数学	数学Ⅱ	2年	微分係数と導関数	斉藤 匠平	26
理科	物理	2年	仕事と力学的エネルギー	野村和佳子	23
保健体育	体育	1年	バレーボール	川原 祐策	20
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	1年	Lesson 8 The Best Christmas Present in the World	宮原 京子	20
	コミュニケーション英語Ⅱ	2年	Lesson 8 The Psychology of Shopping	牧田扶佐子	30
情報	社会と情報	1年	情報化が社会に及ぼす影響と課題	松井 聡	40

ウ 文部科学省指定実践研究に関わる学校訪問 期日：平成27年12月15日(火)

指導助言 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 大滝 一登

文部科学省初等中等教育局財務課 久利 知光

教科	科目	学年	単元名	指導者	人数
国語	国語総合A	1年	<小説>太宰治「富嶽百景」	土肥 香子	26
	国語総合A	1年	<小説>太宰治「富嶽百景」	黒田 圭	27
数学	数学Ⅱ	2年	微分法	斉藤 匠平	26
	数学理解Ⅰ	2年	高次方程式	道下 愛	32
美術	絵画Ⅱ	3年	絵巻物製作 「伊勢物語を読み解く」	河合 雅子	9
外国語	コミュニケーション英語Ⅰ	1年	Lesson 9 History of Long-distance Races	宮原 京子	20

エ 第3回公開授業研究会 期日：平成 28 年 1 月 28 日(木)

指導講話 富山大学人間発達科学部教授 松本 謙一

研究講話 国立教育政策研究所総括研究官 山森 光陽

教科	科目	学年	单元名	指導者	人数
国語	国語総合A	1年	【小説】芥川 龍之介「羅生門」	土肥 香子	26
	国語総合A	1年	【小説】芥川 龍之介「羅生門」	黒田 圭	27
公民	現代社会	1年	国際政治のしくみと動向	廣田 雄希	40
	公民探究	3年	民主政治とは	立田 幸浩	38
数学	数学Ⅱ	1年	式と証明	出口 由梨	21
	数学Ⅱ	2年	積分法	斉藤 匠平	26
理科	物理	2年	波	野村和佳子	23
体育	体育	1年	バスケットボール	川原 祐策	20
外国語	コミュニケーション英語Ⅱ	2年	Lesson10 Floating Education	牧田扶佐子	30
英語	実用英語Ⅰ	2年	How are children and adults different?	林 美香	26

(公開授業研修会) 全体会・松本教授指導講話・山森総括研究官研究講話



(3) 小杉中学校下小中高合同研修会

ア 日時 平成 27 年 7 月 27 日(月) 9:30~11:30

イ 会場 射水市立小杉中学校

- ウ 目的
- ・小杉小学校、歌の森小学校、太閤山小学校、下村小学校、小杉中学校、小杉高等学校の互いの連携を推進するために、それぞれの教育現状を知るとともに、教員間の交流を深める。
  - ・各小学校、中学校、高等学校のそれぞれの指導方針等を理解し、可能な一貫指導の在り方を探る。

エ テーマ及び分科会

1	「学習指導を通して、自尊感情を高めるには」	
	①学習環境づくり	学習規律や学習習慣の定着と学習環境の整備について
	②授業力の向上を目指して	学力向上に向けた授業改善等について
	③家庭学習の充実を目指して	授業と家庭学習の円滑なサイクルの定着について
	④外国語活動の充実を目指して	小学校外国語活動導入を踏まえた英語教育について
2	⑤体力向上を目指して	発達段階に応じた指導の在り方と健康教育について
	「生徒指導を通して、自尊心を高めるには」	
	⑥児童会・生徒会を活性化させる取組	生徒の主體的な特別活動の推進について
	⑦問題行動への対応	ネットトラブルなど今日的な課題について
	⑧配慮を要する児童・生徒への対応	発達障害等のある生徒について

(4) PTA合同研修会(アクティブ・ラーニング授業体験)

ア 日時 平成 27 年 10 月 17 日(土) 14:30~16:40

イ 会場 本校 図書室

ウ 授業者 世界史：小倉教諭(1学年主任) 数学：斉藤教諭(21H担任)

エ 参加者 保護者 22名

## 6 研究の成果

### (1) 生徒対象のアンケート結果より

今回の実践研究では、生徒に2種類のアンケートを実施し、それらの結果を分析することで、現状を正確に捉えることにした。2種類のアンケートとその質問内容は、下記のとおりである。

#### ア アンケート内容

##### ◆ 学習と進路に関する自己診断シート（全校生徒を対象に年7回実施）

「授業に臨む態度」について	①予習をして授業に出席している
	②ノートの取り方を工夫している
	③授業中の先生の発問に対して、積極的に考え、発言しようとしている
	④授業中の発言の仕方がしっかりしている
	⑤授業中にわからないところがあった場合、早めに対応している
	⑥授業の復習をしている
	⑦テストやプリント類を整理している
	⑧（授業に積極的に臨むために、各自が設定）
「家庭学習」について	⑨家庭での学習開始時間を一定にしている
	⑩新しい内容を学習した後は、それを応用・発展した問題に挑戦している
	⑪課題は自力で解答し、期日を守って提出している
	⑫考査に向けて、計画を立て、家庭学習を進めている
	⑬平日1日あたりの家庭学習時間
	⑭休日1日あたりの家庭学習時間

- ・各質問に対して、○(常にそうである)、△(だいたいそうである)、×(そうでない)で回答
- ・家庭学習時間(⑬・⑭)については、分単位で回答

##### ◆ 授業に関する自己評価シート（公開授業参加生徒を対象に年4回実施）

興味・関心	①授業の内容に興味・関心を持って取り組むことができた
	②授業中の活動に積極的に参加することができた
	③先生の話をしっかり聞くことができた
	④授業に最後まで粘り強く取り組むことができた
創意・工夫・表現	⑤授業中の課題に対して積極的に考えることができた
	⑥ペア・グループ活動では率先して意見交換を行うことができた
	⑦自分の考えをわかりやすく相手に伝えることができた
	⑧相手の感想や考えを尊重して、話し合うことができた
	⑨相手の意見を聞き自分の考えを深めることができた
	⑩簡潔でわかりやすく発表することができた
知識・理解	⑪今回の学習で、新たな知識を得ることができた
	⑫今回の学習で、自分でできることを増やすことができた
	⑬今まで学習した知識や技能を使って授業に取り組むことができた
	⑭先生の説明を理解することができた
	⑮先生の質問を理解することができた
資料活用	⑯課題に対する理解を深めるために情報(文献等)を集めることができた
	⑰情報の中から有効で必要なものを選び出すことができた
	⑱課題に対して文献や資料等を活用し、自ら理解を深めることができた
	⑲集めた情報から自分の考えをまとめることができた
集団	⑳ペアやグループ内で協力して取り組み、成果を上げることができた

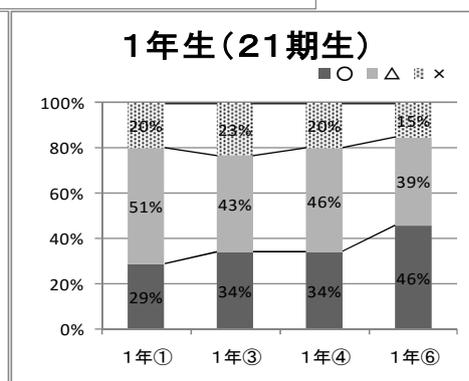
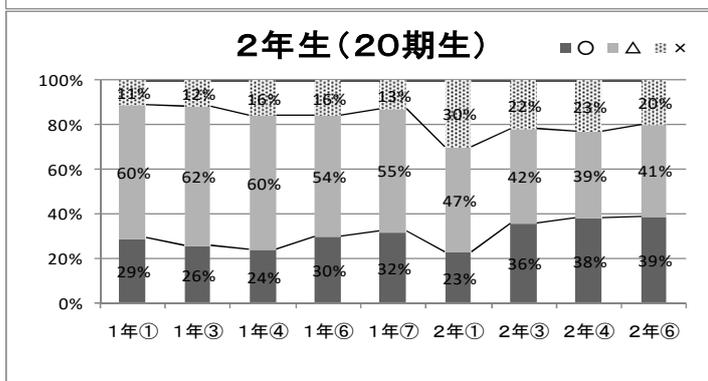
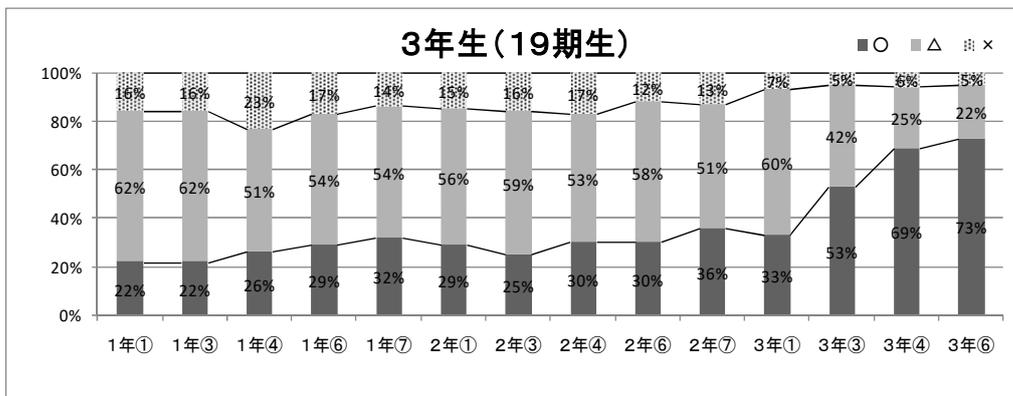
- ・各質問に対して、3(よくできた)、2(普通)、1(やや不十分)で回答

イ アンケート結果

◆ 「学習と進路に関する自己診断シート」より

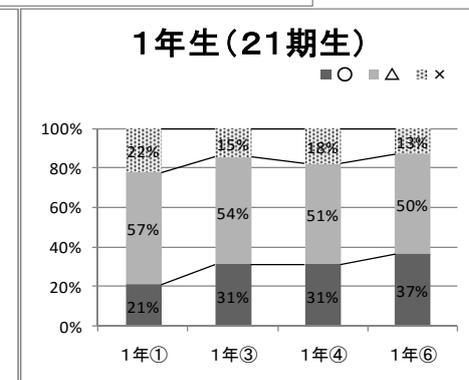
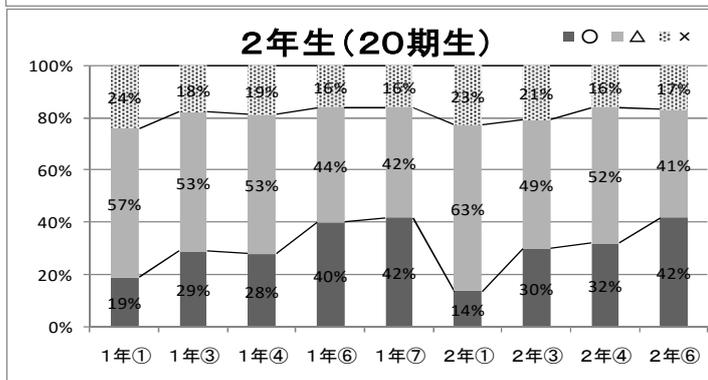
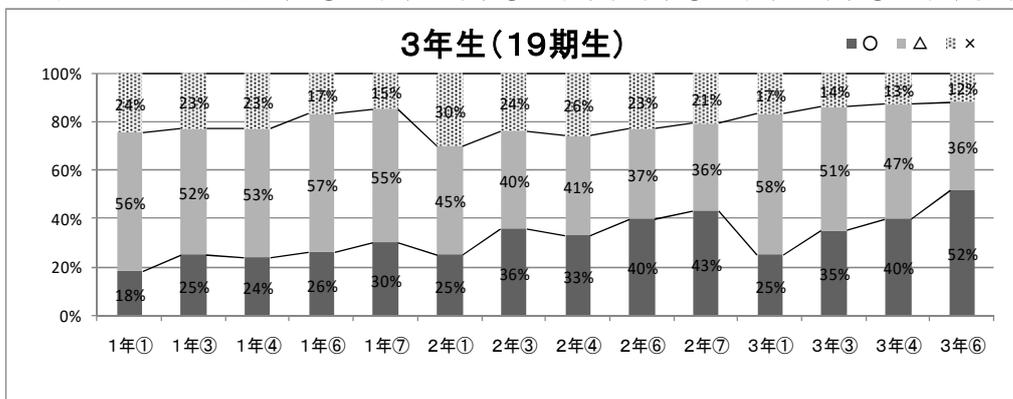
① 予習をして授業に出席している

(アンケート実施時期 ① 1 学期前半、③ 1 学期後半、④ 2 学期前半、⑥ 2 学期後半、⑦ 3 学期)



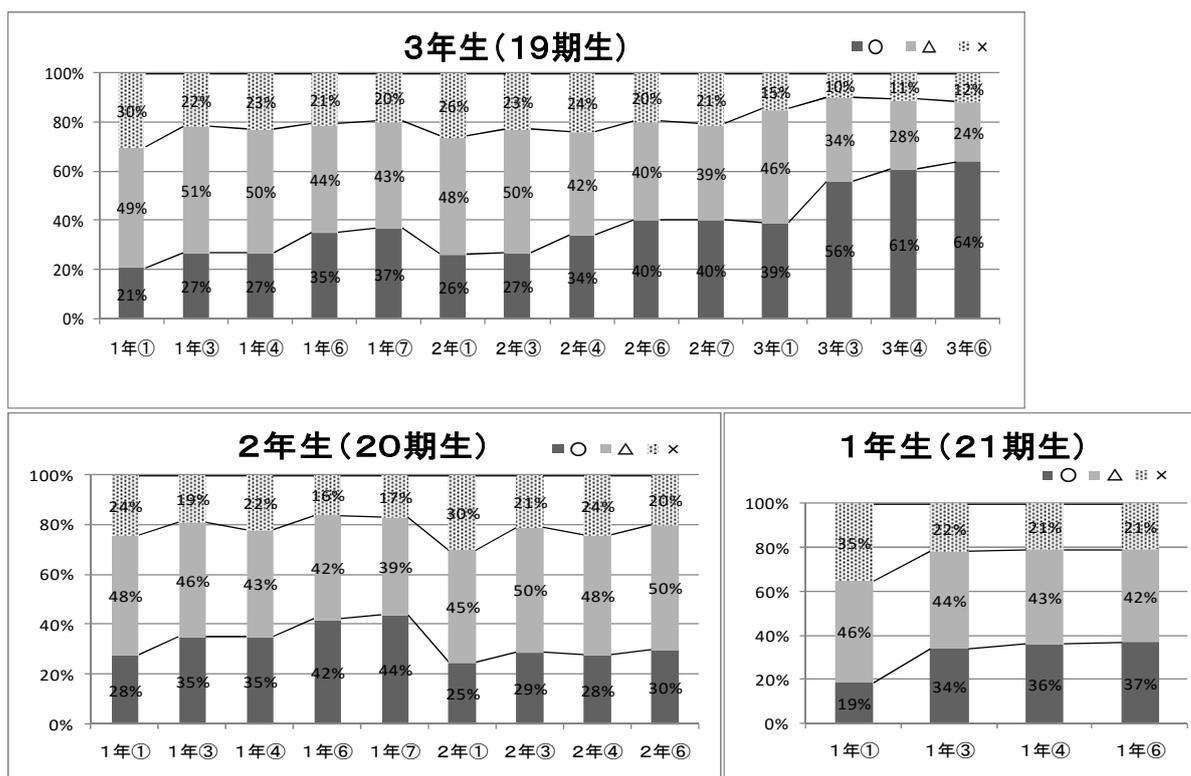
③ 授業中の先生の発問に対して、積極的に考え、発言しようとしている

(アンケート実施時期 ① 1 学期前半、③ 1 学期後半、④ 2 学期前半、⑥ 2 学期後半、⑦ 3 学期)



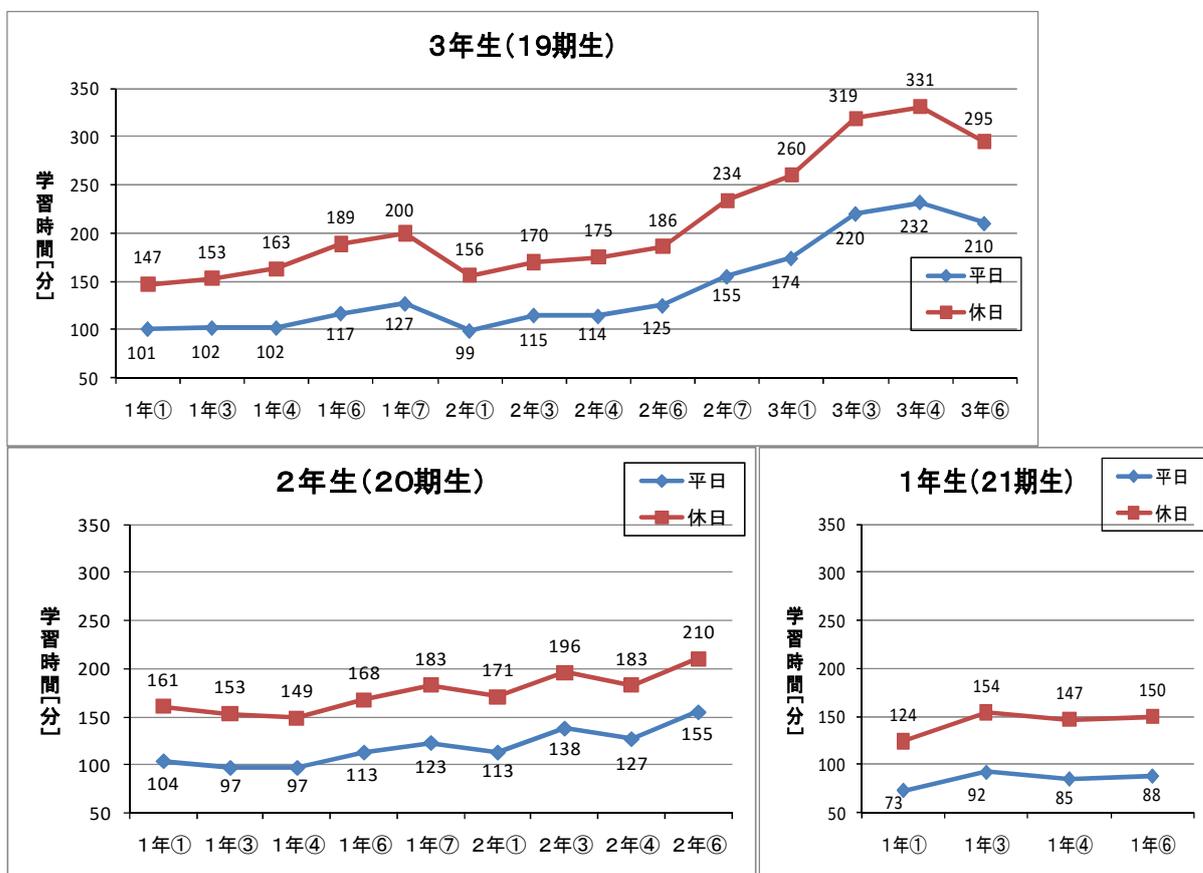
⑨家庭での学習開始時間を一定にしている

(アンケート実施時期 ①1学期前半、③1学期後半、④2学期前半、⑥2学期後半、⑦3学期)



⑬⑭1日あたりの家庭学習時間

(アンケート実施時期 ①1学期前半、③1学期後半、④2学期前半、⑥2学期後半、⑦3学期)





前頁の表は、2013年(実践研究前年の生徒)、2015年(実践研究2年目の生徒)の「学習習慣と学力の関係」を示したものである。右上のゾーンに注目すると、2013年は36%、2015年は63%(2014年は54%)と増加している。生徒が授業や家庭学習に主体的に取り組む機会が増加した成果だと考える。そして、主体的に学習に取り組むことで、学力も定着してきたと考える。

## (2) 教員対象のアンケート結果より

今回の実践研究では教員に3種類のアンケートと教科別協議会記録の作成を実施し、それらの結果を分析することで、現状を正確に捉えることにした。そして、成果と問題を明確にし、次の機会に活かすとともに、それらを全教員で共有することに心がけた。

### ア アンケート内容

#### ◆ 授業担当者メモ (公開授業(公開授業研究会や授業公開 WEEK)時に実施)

指導計画	到達目標	①学習指導要領に基づいた具体的な到達目標が立てられていた ②生徒の実態に即した到達目標が立てられていた	
	展開・形態	③到達目標を達成できる学習課題が提示されていた ④生徒が意欲的に取り組むための工夫があった ⑤生徒が主体的に学ぶことができる展開になっていた	
		評価規準	⑥到達目標に対して適切な評価規準が設定されていた
		授業展開	⑦本時の到達目標が達成できる教材だった ⑧教科書・資料・プリントを効果的に使用した
	発問・説明	⑨生徒に対して明確な指示を行った ⑩生徒の思考を広げたり考えを引き出すために適切な発問を行った ⑪生徒にわかりやすい言葉を使い説明や発問を行った	
生徒の活動		⑫生徒が自分の考えを表現していた ⑬生徒が課題解決のために話し合いや作業などの学習活動を行った ⑭生徒は自分の考えを持ち、積極的に学習活動を行った	
	板書	⑮内容が整理され、わかりやすい板書だった ⑯学習課題が提示され、思考の流れを振り返ることができる板書だった	
		生徒対応	⑰机間巡視等、生徒の理解度や学習意欲を把握し、状況に応じて指導をした ⑱生徒を褒めたり励ましたりし、生徒の意欲を高める働きかけを行った
評価方法	⑲生徒の学習活動や成果物から、到達目標が達成できたかを判断した		

・各質問について、4～1で回答

#### ◆ 授業参観者メモ (公開授業研究会や授業公開 WEEK 時に実施)

#### ◆ 授業分析シート (公開授業研究会時に実施)

#### ◆ 教科別協議会記録 (公開授業研究会時に作成)

### イ アンケート結果

#### ◆ 「授業分析シート」より (平成 27 年度第 2 回公開授業研究会)

第2回公開授業担当者は、「授業担当者メモ」「授業参観者メモ」「教科別協議会記録」および「授業に関する自己評価シート(生徒)」を参考に、授業分析シートを作成した。多様なアンケート等を活用して作成することで、成果や問題点を明確にするとともに、問題点の改善策を考える機会となった。また、次回の公開授業研究会や授業公開 WEEK に向けて、学校全体や教科、個人でどのような準備をしていくかの共通理解を図る機会ともなった。

**全教員の共通理解シート（第2回公開授業研究会「授業分析シート」のまとめ）**

- 工夫した点と成果
  - ・本時の達成目標（課題）を明確にする
  - ・生徒の活動に対する褒めや励ましを意識して行う → 問題を理解したり、正解したときの喜びを感じさせる（達成感）
  - ・生徒の意見を多く取り入れる
  - ・授業の雰囲気づくり → 意見等を気軽に発言できる環境
  - ・ペア・グループ活動の設定 → 学び合い、自分の考えを話す、意見交換、考えの深まりや変化
  - ・付箋の活用（K J法）
  - ・ワークシートの簡素化
  - ・教材の準備（身近な教材、イラスト、カラーコーン）
  - ・質の高い相互評価
- 問題点と改善点
  - ・高校レベルの達成目標（課題）の設定
  - ・授業の流れや形態の検討 → 生徒の実態や達成目標を踏まえた適切な授業計画
  - ・ペア・グループ活動が有効に機能していない場面がある。
  - ・メリハリのある授業（聞く・話し合うなどの場面転換を明確にする）
  - ・生徒が発言する場面の設定 → 全員で意見を共有する場面の設定
  - ・教員からの適切な助言 → 生徒に刺激を与える働きかけ
  - ・簡潔な説明 → 説明し過ぎることで、生徒の自由な発想を制限
  - ・意見等の発表の仕方、プレゼンテーションの仕方
  - ・教科書の十分な活用
  - ・議論に広がりを持たせる教材（資料）
  - ・ワークシートの活用 → 複雑化し、思考の幅を狭めている
  - ・板書の仕方 → 内容が整理され、生徒の思考の変化がわかる板書
  - ・評価の観点や評価規準を明確にする

**第3回公開授業研究会(1/28)・第3回授業公開WEEK(1/22～28)に向けての確認事項**

→ 全員が実践！

- ◎ 単元や本時の授業の到達目標を明確にする
  - 単元の評価規準（評価規準の作成の参考資料[国立教育政策研究所]）を確認する
  - 学習指導要領の内容と小杉高校生の実態を踏まえる
- ◎ 高校ならではの課題や教材
  - 学習指導要領の内容と小杉高校生の実態を踏まえる
  - 教科書を活用する
  - 生徒の思考の広がりや深まりを考慮し、ワークシートや資料を工夫する
- ◎ 授業の流れや形態を検討し、詳細な授業計画を立てる
  - 今までの授業実践→分析（成果と改善点）→改善→授業計画→授業実践のサイクル
  - 導入（課題を明確にする）→探究活動（個人やグループから全体への広がり）→振り返り
  - 生徒が主体的に活動する場面の設定
    - ・ペア・グループワーク導入のタイミング（なぜこの活動を行うかが理解できる）
    - ・ペア・グループワークの成果（行う必要性）
    - ・生徒の活動中の教員の言動（声かけ、次の展開を探る）
  - 生徒が発言する場面の設定（発表の仕方を普段から指導しておく）
  - 学習支援プレートの活用（全授業で有効活用する）
- ◎ 評価の観点や評価規準の明確化
  - 学習指導案に記載されている評価を具体的にどのように行うか→評価の結果の提示

◆「授業担当者メモ」より（平成27年度第3回公開授業研究会）

	教科	科目	学年	人数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	平均		
																							3回	(1回)	
1	国語	国語総合A	1年	27	4	3	3	3	3	3	2	4	4	3	4	3	3	3	2	3	4	4	4	3.3	3.3
2	国語	国語総合A	1年	26	4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	3.6	3.2
3	公民	現代社会	1年	40	4	3	3	4	4	4	2	3	4	4	4	3	4	3	2	2	3	4	4	3.4	2.8
4	公民	公民探究	3年	38	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	3	2	3	3.0	2.7
5	数学	数学Ⅱ	2年	27	4	4	2	4	4	3	2	3	2	2	2	3	4	4	2	2	3	3	3	2.9	2.8
6	数学	数学Ⅱ	1年	21	3	3	3	4	4	2	3	3	3	2	3	3	4	4	3	3	3	3	2	3.1	2.9
7	理科	物理	2年	23	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	4	3	3	3	4	4	3	3	3	3.4	3.2
8	外国語	コ英語Ⅱ	2年	30	4	4	4	3	3	4	4	4	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	3.7	3.1
9	英語	実用英語	2年	26	3	3	4	4	4	3	3	4	3	2	3	4	4	4	2	2	3	3	4	3.3	3.0
10	保健体育	体育	1年	20	3	3	3	4	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3.0	3.1

今回のアンケートでは、①(学習指導要領に基づいた具体的な到達目標が立てられていた)、⑤(生徒が主体的に学ぶことができる展開になっていた)について、前回と比較し高い値を示している。学習指導要領と本校の生徒の実態を踏まえた「本校の各教科の重点ポイント」を基に、課題の内容や授業形態を工夫してきた成果であると考え。また、⑬(生徒が課題解決のために話し合いや作業などの学習活動を行った)、⑭(生徒は自分の考えを持ち積極的に学習活動を行った)については、毎回高い値を示している。

一方、⑩(生徒の思考を広げたり、考えを引き出すために適切な発問を行った)、⑮(内容が整理され、わかりやすい板書だった)、⑯(学習課題が提示され思考の流れを振り返ることができる板書だった)については、前回同様に低い値を示している。発問の仕方や板書の仕方、プリント類の内容について、今後も検討し、改善していく必要がある。

今回は高い値を示した科目、または項目であっても、生徒の成長に合わせ、今後も実態に合った授業改善を継続して行っていくことが大切である。また、課題の設定が本校の実態に合っているか、高校のレベルであるかなどは常に検証していく必要がある。

### (3) 成果 くまとめ

#### ア 学ぶ意欲を高め主体的な学びを引き出す「授業研究」の推進

##### ○ 生徒との親和関係の構築

- ・3年間継続して学校をあげて全教科で授業改善に取り組んできたことにより、生徒が穏やかになり、高校ならではの授業がなされるようになってきた。
- ・生徒と教員の親和関係が成立しており、教室に温かい雰囲気がある。生徒も「間違っても恥をかかない、意見を言ってみよう」という姿勢が見られるようになった。
- ・授業において、「本時の課題」や「活動内容」が明確に提示されるようになり、生徒も次に何をどのようにすればよいのかを考えながら主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。

##### ○ 継続した授業改善

- ・各学年や教科部会を中心に、継続して授業改善に取り組む体制ができ、指導力向上に向け、日常的に授業改善に取り組む姿勢が多く見られるようになってきた。
- ・ベテラン教員から若手教員に対するアドバイスの機会が多く見られるようになり、若手教員の指導力が向上してきた。また、若手教員が授業力向上に向けてチャレンジする姿にベテラン教員も刺激を受け、授業改善に取り組む姿勢が見られるようになってきた。
- ・外部からの指導助言者や他校の先生方からの多様な意見や適切なアドバイスをいただく機会が増えたことで、授業改善に向けて大きな刺激を受け、さらなる改善に向けての力となった。

##### ○ 中学校教員との連携による授業研究の推進

- ・中学校教員との連携による授業研究を通して、生徒の思考に即した適切な授業展開の工夫や生徒の努力を励ます形成的な評価、言葉かけが主体的な学習の質を高めることを確かめることができた。

## イ 各教科・領域の円滑な連携による多様な言語活動の充実

### ○ 全教科の連携による取り組み

- ・ペアやグループ活動、プレゼンテーションの機会を積極的に取り入れたことで、生徒が自らの考えや意見をわかりやすく相手に伝えようと様々な工夫をする姿が見られるようになった。
- ・教員が教科を超えて情報交換を行うことで、生徒の実態や授業形態による成果を共有し、生徒のよさを引き出す発表の機会を設定するようになった。

### ○ 高校3年間を見据えた課題研究の実践

- ・1年次の「産業社会と人間」や2・3年次の「総合的な学習の時間」の内容を見直し、これらの時間を活用して高校3年間を見とおした課題研究の実践に取り組むこととした。
- ・スーパーバイザーの山森光陽総括研究官の助言を踏まえ、「生徒自身が問いを持ち、解決し、さらに問いを持つ」という高校ならではの学習を目指し、各学年において課題研究における指導改善を進めることができた。
- ・系列や分野の特色を活かした取り組みの充実を図ることができた。発展的な内容についても、生徒が高い興味関心を示し、積極的に取り組む姿が多く見られた。

## ウ 様々な連携協力による教育活動の充実及び調査研究の推進

### ○ 小中学校や地域等との様々な連携推進による信頼関係の醸成

- ・中学校教員との連携による授業改善の取り組みや小中高の合同研修会などとおして、校種を越えての相互理解に深まりが見られた。
- ・地域との交流活動をとおして本校の教育への理解が進み、本校への信頼や期待の声を聞くようになった。

## 7 今後の課題

### (1) 課題

#### ○ 育てたい力を明確にし、その達成により効果的な形態や活動を導入することが必要

- ・アクティブに見える学習活動と主体的で能動的な学習活動とは違う。型が先行するのではなく、目的を明確にし、より効果的な方法を選択して授業改善に取り組む。
- ・教員は準備をし過ぎたり、指示を与えすぎたりする傾向が強い。「手を引く」ことも大事である。高校を卒業する時には、自らの力で問題を解決する力が身につくように指導を工夫する。
- ・評価規準を明確にし、信頼性・妥当性のある評価に努める。また「形成的なフィードバック」を行い、生徒の改善の方向を示し、次の学習へ意欲を高める指導を工夫する。
- ・学んだことを学校生活で実践するなど、学習の意義や目的を明確にするとともに、学習の成果や本人の成長を実感できるよう配慮する。

#### ○ 育てたい力を知識の羅列、表面的な理解から深い理解、概念形成に至る実践へ深めることが必要

- ・「親学問」や将来の職業につながるテーマについて探究を深め、新たな知識、価値をつくる能力の基盤を育てよう、個人内外の知識、資料等を活用し、「広げる思考」と「狭める思考」を行き来しながら理解を深める高校ならではの実践を行う。
- ・発表や議論の基本的な進め方を身につけていない生徒がいる。全教科で発表の型を習得するよう、発表の仕方や議論の受け応えを定型化したものを設定し、共通に活用する。

#### ○ これまでの実践を基盤に、次年度以降も、地元小中学校等の支援を得ながら、継続して全職員をあげて実践研究に取り組むことが必要

### (2) 継続的な授業研究の推進にむけて

#### ○ 基本姿勢

- ・教員の授業力向上が生徒の学力の定着・向上に繋がる
- ・「Every child matters」どの子ども大切だとの精神を基本とする
- ・「teacher-centered」から「student-centered」へ
- ・「usage」ではなく「use」へ…身につけた知識を使った課題解決を重視する
- ・生徒の可能性は無限大、これぐらいと枠をはめない
- ・先生が、授業が、教科が好きだと思わせる授業を実践する
- ・教育のプロとして「情熱」が伝わる授業を行う

○ 指導技術

- ・生徒が主体的に活動する場の設定を工夫する
- ・生徒の想定外の質問を無視せず、切り返すことが大切である
- ・考えさせる場面では黙ってしゃべらず、指示せずに答えを待つ
- ・説明の明瞭さは「見やすい」、「聞きやすい」こと
- ・生徒の間違いはその場で修正する

○ 方向性

- ・高校は「知識、価値、文化」をつくりうる能力育成へ … 深い理解、知識構成・概念理解に向け、高校ならではの学びを実践する

8 その他

特になし